

1 グループ研修

①－1 「保幼小の架け橋プログラム」の理解推進と幼小接続の工夫

1 協議内容

(1) 小学校との連携について

- ・ 中学校区の校長・園長が顔見知りになり、気軽に声を掛け合える関係作りが大切である。そこから、幼小連携から接続への道筋を築いていく。
- ・ 小中の授業公開や幼稚園の保育公開などを行うことで、互いの教員が、環境作りやこどもへの声掛け等を知っていくことが大切である。

(2) スタートカリキュラムについて

- ・ 浜松市版「つながるカリキュラム」を参考にしながら、幼稚園の「アプローチカリキュラム」と小学校の「スタートアップカリキュラム」を見せ合い、幼児教育についての理解を深めるとともに、有効的な活用方法を探っていくことが必要である。

②－1 つながりのある発達支援教育の推進

1 協議内容

(1) 5歳児健診モデル園の取組についての報告

- ・ 5歳児健診全体の流れのイメージの共有
 - ①問診（保護者、担任）→②スクリーニング（専門スタッフ）→③健診（園医、保健師）→④保護者への結果通知→⑤保護者への結果説明会→⑥事後相談
- ・ 現段階での成果や課題
 - ・ 要支援児の洗い出しのフィルターとして有効である。
 - ・ 健診実施に必要な業務が多岐にわたるため、全園実施を見据えた人的・財政的補強が必要である。

(2) 全園実施に向けた課題

- ・ 外国籍保護者・園児への対応や ICT 機器の充実が必要
- ・ 5歳児健診と「個別の支援計画」作成事務、就学先相談に関する業務などの統合・精選

②－２ つながりのある発達支援教育の推進

1 協議内容

(1) 就学に向けて

- ・ 夏季就学相談の後、保護者との面談を行い、今後の方向性について話をすることができた。面談では、保護者の気持ちに寄り添いながら、こどもが今後どのような支援を受けながら、どのように成長してほしいのかを、具体的に話をすることが大切である。また、小学校の発達支援学級を見学したり、発達支援コーディネーターと話をしたりする機会を設け、就学先の情報を提供してもらい保護者の安心感につなげていくことも、幼稚園としての大切な役割である。
- ・ こどもにとってどのような就学先が適切か、保護者が見極め判断するためには、幼稚園側からの丁寧で具体的な情報提供と説明が必要である。そのためには、幼稚園と小学校が連携し、保護者に何を伝えておくべきなのかを、共通認識していきたい。

(2) 個別の支援について

- ・ 担任は、個に応じた支援の方向性を見失わないためにも、個別の支援計画、指導計画を定期的に確認する必要がある。
- ・ 園、保護者、療育機関が連携し、就学に向けた療育機関や幼稚園での過ごし方を確認していきたい。

③－１ 安心・安全な園経営のための危機管理能力の向上

1 協議内容

(1) 災害時の対応について

- ・ 防災講座や防災ダッグを実施した中で、用意しておくべき物（こどもが持てる非常持ち出し袋・簡易トイレ等）や身を守るための姿勢（ダンゴムシポーズ・カエルポーズ）について共有し、話し合った。身を守る姿勢については、園内でどの姿勢にするのか確認し、統一しておくべき。
- ・ 7月30日の津波警報発令時、避難指示が出ていない地域でも学校に避難する人がいたり、園舎改修工事等で現行の避難経路での避難ができなかったりする園があった。予期せぬ事態が起きたり、通常と異なったりする際にもスムーズに対応できるよう、全職員で危機管理マニュアルを把握したり、避難経路等を共有したりしておく必要がある。

(2) 野生動物の対応について

- ・ 熊、猪、鹿、猿等、野生動物の被害が全国的に話題になっている。これらに対応できるよう、マニュアルの見直しや対策が必要になっている。

③－２ 安心・安全な園経営のための危機管理能力の向上

1 協議内容

(1) 害虫・動物対策・除草対策について

- ・ マダニ、イラガ、スズメバチ、毛虫等の発生状況や熊、鹿等の出没情報の共有を図り、それぞれの園での対応や対策を紹介し合い共有した。
- ・ メリケントキンソウは、防塵剤を撒いたり人工芝を敷いたりすることで対策できる。

(2) 災害時や非常時の対応について

- ・ 7月30日の津波警報発令時の経験から、職員が臨機応変に動くこと、場合によっては地域の小学生を受け入れることもあること、緊張感の持続と安心感を保つ中での指導の難しさなどを実感した。瞬時の決断の必要性や時系列に沿った記録をとっておくことの重要性を確認し合った。
- ・ 垂直避難をする判断、避難物資の保管場所、避難場所の暑さ対策など、地域ごとの実状に合わせた課題の対応を話し合った。
- ・ 命を守ることを大前提に、園長の素早く対応する力や的確に判断する力の向上に今後も努めていく。

④－１ 職員の育成と資質向上につながる園経営の在り方

1 協議内容

(1) 研究協議（自己課題における実践情報交換）

- ・ 複式学級が増え、保育に悩んだり、不安を抱えたりする職員が多い現状である。園内では職員同士が互いに学び合う環境が少なく、近隣の園との研修方法の工夫が必要である。
- ・ 職員も多様化しているため、個に合わせた指導方法を探っている。保育の具体的な場面を通して丁寧な指導が必要な場合もある。

(2) 職員の育成について

- ・ 若手職員には主任が自分の経験を基に、相談に乗ったり保育を伝えたりして、保育の質の向上に努めると良い。
- ・ 不適切保育（虐待）について全職員で共通理解をし、保育することが大切である。教師間の信頼関係の構築を行い、教師の言動が与える影響を互いに見合ったり、アサーション・トレーニングをしたりすることが効果的である。

(3) 今後に向けて

- ・ 山本五十六の「やってみせ」の格言を参考に、園長として自分を磨く、アップデートしていくことが必要となる。また園経営に必要な法規は園長として知り、学ぶことも大切である。
- ・ 園内研修だけでは職員育成が困難である。部会ごとに小集団で学び合える研修を計画していく必要がある。

⑤ — 1 満3歳児保育の在り方

1 協議内容

(1) 満3歳児の様子について

- ・ 集団生活での成長が著しく、目に見えて成長している様子が分かる。
- ・ 満3歳児が入園したことにより園児数が増え、人との関わりが増えた。

(2) 課題、次年度に向けて

- ・ ねらいや援助、体験などのおさえについては、発達段階の目安をもち、様子を記録にとって積み重ね、次年度につなげていく。
- ・ 職員配置やアレルギー対応、園外に出る際のチャイルドシートなど、安全面への配慮が必要である。
- ・ 手引書を作成することで、満3歳児の入園手続き、生活の様子、食事面の配慮などを可視化し、満3歳児保育実施園で共通にしていく。

⑥ — 1 主体的・対話的で深い学びの実現

1 協議内容

(1) 2学期における各園の実践報告

- ・ 教師は、「深い学び」につながるこどもの多様な「気付き」を事前におさえておくことで、こどもの気付きを見逃さず、試行錯誤そして遊び込みへと発展させるチャンスを得ることができる。
- ・ 保育の中でこどもから問いが生まれ、試行錯誤する姿を大切にしながら、深い学びを意識した保育にあたっている。
- ・ 指導案にも主体的・対話的で深い学びのおさえと園目標とのつながりを明記し、職員が園目標を踏まえて保育を計画・実践している。
- ・ こどもの実態を捉え、教師の願いを明確にした上でアセスメントをし、学びが深まるよう保育計画を立て実践してきた。その中で、ごっこ遊びの重要性を感じている。
- ・ 園だよりやブログを用いて、主体的・対話的で深い学びにつながるこどもの姿を具体的に伝えてきた。保護者にも伝わってきている。